

座談会 東アジアの近代と梁啓超 上

狭間 直樹 (京都大学)
佐藤 慎一 (東京大学)
宮村 治雄 (都立大学)

——座談会 東アジアの近代と梁啓超 上——

佐藤 昨年(一九九九年)の暮れに、京都大学人文科学研究所近代中国研究班の共同研究の成果である『梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』が、みすず書房から刊行されました。一九九九年というと、中華人民共和国成立から数えて五〇年、日本における近代中国思想史研究の礎石を作った小野川秀美先生の『清末政治思想研究』(みすず書房、一九六九)の刊行から数えて三〇年ということになります。この年に大著『梁啓超』が刊行されたことは、単なる偶然かもしれませんが、研究史の流れの中で考えると、幾つかの点で画期的な出来事

であるように思われます。まず、日本に本格的な梁啓超研究が出現したこと自体が画期的です。近代中国の思想史が学問的研究の対象となったのは、中華人民共和国成立以後のことです。中国と台湾以外で研究の中心となったのは日本とアメリカでした。ところが、日本とアメリカの近代中国思想史研究は、ひどく性格が違っていました。その違いを象徴するのが、それぞれの国で梁啓超研究と章炳麟研究の持つ比重の違いかと思えます。アメリカでは梁啓超研究がとりわけ盛んで、レベンスンの *Liang Chi-chao and the Mind of Mod-*

ern China, 1968 を皮切りに、ハオ・チャンの *Liang Chi-chao and Intellectual Transition in China: 1890-1907*, 1971 やフィリップ・ホフンの *Liang Chi-chao and Modern Chinese Liberalism*, 1972 と、七〇年代前半までに研究書が三冊も刊行されていますが、章炳麟研究はほぼ皆無に等しい。逆に日本では、多くの優れた章炳麟研究があるかわりに、梁啓超にかんするモノグラフは皆無です。

——座談会 東アジアの近代と梁啓超 上——

リベラリズムといった欧米的価値基準からして了解可能な梁啓超にまず関心が向けられたということは、十分にあり得ることです。他方、中国研究の分厚い蓄積の上に出発した日本の近代中国研究の場合、伝統学術の大家であり、かつ革命家でもあった章炳麟に共感する研究者が多かったということとは、十分にあり得ることです。日本の場合、おそらく多くの研究者は、西洋学術の導入者であり、かつ革命に反対した梁啓超を、ひどく軽い存在とみなしていたのではないかと思います。しかし、現実には中国の思想界に及ぼした梁啓超の影響力や変革作用の大きさを考えますと、こうした梁啓超の取り扱いはいささか不当であると感じていました。じつさい、二〇世紀の中国人の間で常識となった事柄も、その起源を探ると、梁啓超に辿り着くことが少なくありません。章炳麟のような孤高の思想家と違い、梁啓超の場合、あまりに多くの人に受け入れられたがゆえに、その思想の独自性や画期性が後世から見えにくくなって損をしています。何が、何と言っても自然科学を除くほ

は全ての学問領域で従来の学問の抜本的変革を主張し、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての中国の巨大な転換期を思想的に導いた人物ですから、章炳麟に対するのは別な基準で本格的に研究することは、日本の中国研究者に課せられた宿題だと思っていたのですが、その宿題がこの『梁啓超』でようやく果たされたという感じを持っています。

は、国民革命研究の後に続くのは、おそらく抗日戦時期を対象とする研究になるのではないかと予想していたのですが、意外にも、対象時期から言えば辛亥革命以前に遡り、しかも対象を日本における梁啓超の西洋思想受容の問題に絞った共同研究を選択されました。これは、これまでの人文研の共同研究の流れから言うと、かなり急激な方針転換だという気がします。

『梁啓超』が研究史の上で画期的ということには、もう一つ、京都大学人文科学研究所における共同研究の流れの中で画期的という意味があります。人文研では、たしか一九六〇年代後半、ちょうど『清末政治思想研究』が刊行された頃に、小野川秀美先生と島田慶次先生を中心に辛亥革命研究班が組織され、その成果が『辛亥革命の研究』(筑摩書房、一九七八)としてまとめられました。その後、リーダーが狭間さんにバトンタッチされ、五四運動研究、国民革命研究と、革命史の流れに沿って対象を移しながら共同研究を続けて、日本の近代中国研究を引っ張ってこられたわけです。私

今日は『梁啓超』の編者である狭間さんと、『梁啓超の西洋思想家論』(『中国—社会と文化』第五号、一九九〇、後に、宮村治雄と文化)を著し、日本における梁啓超の西洋思想受容の問題の研究の先鞭をつけた日本思想研究者の宮村さんに出席して頂いておりますので、中国研究者の目に映った梁啓超像と日本研究者の目に映った梁啓超像の異同といった問題を中心に、議論を進めていきたいと思っています。

まず狭間さんから共同研究の狙いや成果、あるいは研究を終えた今持つておられる梁啓超イメージなどについて語って頂き、議

論の口火を切って頂きたいと思います。

京大人文研の近代史研究

狭間 京都のことをよくご存知の佐藤さんが今、言われたことはほぼそういう話なんです。小野川秀美先生の研究というのは全くひとりで始められたのです。これにはいろいろな経緯があるのですが、もともと金史の研究者だった先生が近代史に興味を移して研究を始められた。そして島田虔次先生は明代史の研究者なのですが、全く動機が違って、人文研が古いとこしかやらないのはよくない、近代をせねばならないということとで始められた、いわば遊軍的に始められたのです。小野川・島田両先生が始められたことで、人文研に近代史の分野がだんだんに確立されていった。簡単にいえば、初めは本もなかった。吉川幸次郎、倉石武四郎両先生が研究所の書庫の基礎を据えられたのですが、その時に吉川先生などは清朝の考証学一本ですから、たとえば、和刻本というようなものは「こういうものは本ではない」と言って相手にされなかつた。

た。和刻本が本でないとしたら、それ以降の本なんて問題にならないでしょう。ですから研究所の書庫にはたいへんにいい本が沢山あるといつても、古い伝統的な学問のための本ばかりだった。そこで近代史を始めるのですから、小野川先生はひとりで本を集められた。さらに、人的体制でいえば、近代史なんか入り込む余地はなかった。しかしやはり近代史が要るということで、まず何をされたかという助手を探った。助手を探るといふことには意味があるのです。人文研では正規の研究班には助手が付いた。正規の研究班と認められるかどうかというのは要するに研究所の中に、公認のテリトリー、いわば市民権を主張できるかどうかの基本問題なのです。小野川先生はそういうことをあまりなさらないので、島田先生が努力された。そして、とにかく助手を探れることになり、初めて助手を公募したのですが、その最初が私だった。それが人文研最初の近代史のポストなのです。

佐藤 それはいつ頃のことですか？

狭間 六八年の一〇月です。研究所の体

制としては、そこから始まった。しかし、近代史の必要を言うための基礎はできていた。小野川先生の本は、みずす書房版に先立つ一〇年ほど前に、「東洋史研究叢刊」として出ていました。それを一層普及させようとして、島田先生が仲介されて、みずす書房の増補版が出たわけです。島田先生も六五年に自ら『中国革命の先駆者たち』（筑摩書房）を出されました。さらに言えば、五九年に『民報』の影印本が出たのをきっかけに小野信爾さんが肝煎りとなつて、正規の研究班ではない研究会があった。だから、ほぼ一〇年の前史があるんです。その研究会ではまず『民報』の重要文章を、人文研の伝統である「会説」方式で読むことから始めた。公認されてないといつても、小野川・島田両先生が指導者ですから、それはたいへんしっかりした研究会でした。正規の研究班を発足させるには当然に班の研究題目が要りますが、『民報』の会説が基礎になっていましたから、まず辛亥革命、ということになりました。それが七八年に『辛亥革命の研究』（筑摩書房）という形で

まとまります。そのころの雰囲気は佐藤さんも体験しておられるとおりです。

佐藤 私は一九七二年の秋から半年ほど、ちょうど小野川先生が京都大学を停年退官される直前の時期でしたが、辛亥革命研究班に参加させて頂きました。京都の研究者だけではなく、東は名古屋、西は神戸から多くの研究者が毎週一回の研究会に集まって来られるのに驚きました。しかも、研究者の世代もバラエティーに富んでいましたね。

狭間 それは共同研究として広く所外の研究者の参加をえて進められたため、京阪神・関西の研究者の交流の場というか、センター的な位置という役割も必然的に同時に持ってしまったわけです。たとえば、里井彦七郎、北村敬直、波多野善大先生ら、小野川・島田両先生の同世代の方が皆集まっていた。その下の世代が小野信爾さんら、短い期間でしたが、かの高橋和巳さんもメンバーでした。その下が私たちの世代です。出発点はそんなことであって、辛亥革命の研究をしるべき原典資料、こ

の場合には『民報』ですが、それを基礎にしなから、利用できるかぎりの文献をあつめてそれを徹底的に読み抜いてやっていくのが、小野川先生の研究スタイルであり、島田先生の指導の方針でもあった。そして小野川先生の退官にあわせて辛亥革命を了えたあと、佐藤さんが言われたように、五四運動、国民革命というふうに、言ってみたら、中国近代史のビッグ・イベントをテーマに掲げて、各人それぞれに興味を持つ問題を研究するという形で、研究会を進めてきたわけです。

たとえば五四運動のとき、辛亥革命の『民報』に当たるものをというところで、『新青年』をとりあげた。しかし、これは全部読むわけにはいきません。ですから、どういうシステムでやったかといいますと、班員がそれぞれ二冊ずつ『新青年』を分担して、重要論文はその梗概について詳細に説明をする、他のものは数行の説明ですませる、そういう形で一応『新青年』は全部押さえるということが始まりました。島田先生はたいい全部読んでおられました。

『新青年』を一年半ほどで終え、そのあと、当時の重要雑誌『新潮』『解放与改造』や『嚮導』など約二〇点ばかりを、それぞれ数回の猛スピードでこなしました。『五四時期期刊紹介』という、それは便利なものが大いに役にたちました。あまり難しくはない大量の文献の内容とそれに映された時代状況をメンバー全体の共通認識とするのに、これは有効な方法でした。そのような基礎の上に、全五函、十八分冊の『五四運動の研究』（同朋舎）ができたわけです。そしてそのあとは、時代的に下って国民革命にきました。それで、辛亥を含めていわゆる民国期の前半期をほぼ終えました。

国民革命のあとをどうしようかと考えましたが、何か新しいものを作りたい、さりとてセンター的な要素も維持したいということ、そこで研究班を二つに分けた。かつて毎週やっていたのを隔週にして、私が一つのをやる、森時彦君にも一つのをやってもらう。センター的要素の強い中国近代史の諸領域をカバーしたテーマのものを森君がやってくれるというので、私

は専門的にいくらか特化したことをやることにしました。そのテーマに梁啓超を選んだのは、実は宮村さんの論文なんかから啓発を受けたのですが、日本が中国の近代にどう媒介的に絡んでいたかの問題がこれからの日本の中国近代史研究にとって必要な視座であろう。我々もいろいろ注意をしていましたけれど、その視座はあったとしてもそれを体系的に追求しようとしていなかったところに、宮村さんの「梁啓超の西洋思想家論」が出た。これだけのものがあるというのに、われわれ日本の中国史研究者がほうつておくわけにはいかない。それに、夏曉虹さんの研究『覺世与伝世——梁啓超の文学道路』も出て、梁啓超と蘇峰の關係も明らかにされたわけで、画期的な成果でした。佐藤さんが言われたように、文明史的意義は衆目の一致するところですし、それには何といっても一番とつきやすい、日本との関わりを問題にするなら成果が上げやすいであろうと、梁啓超に狙いをつけました。そこで、「日本を媒介とした西洋近代認識」に焦点を合わせた梁啓超の研究班を九三年

に発足させました。初めは三年計画だったのを、延ばして四年になりました。梁啓超が近代中国の学術文化の大転換をなしとげた人物であるということ、これは中国近代史の側にとつては常識で、しかもそれがほぼ日本の明治文化を踏まえてなされたということも、おおよそ分かっていたわけですが、フイエ、兆民の『理學治革史』との関連は宮村さんが既に明らかにされた。それらを踏まえてもっと広く全体像に迫れないか。梁啓超は、言ってみたら、今の人文社会科のほとんどすべての分野にわたつての文章を書いた人です。高低はあつても、大抵のものは当時としては第一級の水準です。日本の側からいえば当然に問題があると思いますが、とりあえず、中国の側からはそうです。そして実際に梁啓超以降、中国の学術体制は大転換をとげます。たとえば、佐藤さんが言われた歴史観です。春秋戦国時代にたいする評価が百八十度変わった。つまり諸子百家の時代が文化の絢爛たる開花時代と評価されるようになったのですが、それは儒学の道統からする評価とまるで逆

のものです。人物評価でも、王安石を政治家としてたいへんな人物であるというふうな評価を逆転させます。評価の逆転のためには、中国の文化的基礎、伝統的な文化体系とは違うものによつて取つて代えなければならぬのですが、そのための基礎を梁啓超に与えたのが明治日本だったと思うのです。

梁啓超はとにかく等身の著作を残したのですから、全部やろうとしたら三年や四年では到底できません。また、佐藤さんが挙げられた三先生に代表されるアメリカの研究もあります。先行研究でもっと重視したのは、張朋園先生の六、七〇年代のお仕事です（『梁啓超与清季革命』『梁啓超与民国政治』等）。それらの研究を足場に、日本でやるのですから、日本の側から、日本との関わりに焦点を合わせてやってみようというのが、梁啓超を選んだ一つの理由です。また、日本の中国近代史研究は革命史研究というか、革命史を機軸とする視点から主としてなされてきたと思います。少なくとも、私なんかはそうであつたと言えます。

もちろん革命的な観点を全部抹殺するよいうなこの頃の風潮は問題ですが、それも背景としてあつたのですが、やはり一番やりたかつたのは、東アジアの隣国、日本における中国近代史の研究、中国の近代に日本がいかに関わつたのかという視点からする研究でした。そしてそれが、班員の方がたの多くの有意義な発見によつて、このような形で実を結んだわけです。我々が梁啓超研究に挑むことになった転換点、きつかけはそういうところにありました。

梁啓超のイメージ

狭間 梁啓超そのもののイメージということですが、恐らく中国の人でも歴史に興味のある人でないと、もうほとんど忘れられていたと言えるのではないかと。在世当時の赫赫たる名声ということからすると、あまりにも落差が大きすぎます。梁啓超という人は、ある意味で相当に政治の好きな人だつたと思います。しかし単なる政治家とはもちろん違う、政治的人間、ならいくらか当たるかと思う。彼が政治的に大

きな意味をもつたのは、学術的な根拠にたつて自分の政治的主張を展開したからです。中国全体の変革を考えての発言を、手の届く限りあらゆる分野でやろうとし、あれだけ才能のある人ですから、すべての分野で相当の成果を上げました。ですから何か彼が手を染めた分野、例えば新聞学の雑誌が出ると、梁啓超はこうだつたとすぐ担がれる。図書館学でもそうです。本業といつてよい歴史や政治経済学の方では、より進んでしまったからでしょうか、かえつてあまり言いませんが、今の自由化の中で出てきている新しい学問分野では、梁啓超が何かやっていると、必ず自分たちのこの学問の開拓者なんだと言われるのが、今の中国での梁啓超の占める位置だと思えます。台湾の場合ちょっと違うのは、張朋園先生に代表されるような研究者は居られた。しかし、国民党支配のもと、孫文の研究と称するものは腐るほどあるけれど、にもかかわらず、もつと大事とはいかなくとも、少なくとも同じぐらい大事な梁啓超はなおざりだつたと張先生は怒るわけです。それで、自分は

一生懸命やつたということがあつてのことでしょうけど、日本でこういう事をやつたのは大変に嬉しいということで、張先生は中国語版の序文を書いてくださった。そういう事も含めて、やはり梁啓超が、余りにも起伏の大きい中国近代の政治の流れの中で不当に没却されてきたことは確かです。しかし、政治的には成功しなかつたとはいへ、彼が政治的に実現しようとしたこと、そうしようとして学術面、文化面で打ち立てた基礎は、後の中国に大きな影響を与えた。中国近代の文化人の中では少ないのですが、彼自身、大臣に二回なつています。法務大臣（一九一三年、熊希齡内閣の司法総長と大蔵大臣（一九一七年、段祺瑞内閣の財政総長）と。はつきり言つて、どちらも碌なことをしてないのですが、それはまた別に検討しなければならぬ。しかし、彼がそれだけの政治的なポストに就くような活躍、それだけの社会的地位というものを辛亥以前に築いていたということ、つまり彼がやろうとしたことが新しい中華民国の中で大臣ポストと繋がるものだったとい

うことをやはり見ておくべきだと思います。

もう一つここで披露しておきたいのは、梁啓超と康有為の関係です。康有為の弟子ということと彼は否定したことはない、復辟の時には軍事的対決までしているのにそうなのです。しかし、そこには何となくはなしにシツクリ来ないものがある。竹内弘行君の論文（梁啓超の康有為への入門従学をめぐる）は、その一側面に光を当てたのですが、昨秋、この本が出た数日後に梁啓超の孫の梁從誠という方に会う機会がありました。神戸の華僑の学校、同文学校の百周年と言うことで、創立の唱道者、梁啓超の後代として招かれて来日されたのです。その方がお父さんの梁思成から聞いた話で、康有為が家に来るのが大変嫌だったとのことでした。なぜかという、康有為が帰った後、父（というのは梁啓超です）は必ず物凄く不機嫌になる、あの爺さんが来ると家の中がおかしくなるから嫌だった、というのです。それを聞いて、梁啓超が康有為の弟子であり、「康梁」と常に併称されてきたのに常に何か距離があった、あるいは

違和感を持ちながら進んできたという関係の、一番の根本のところがこれではないかと思ひ、師弟関係の内実のかんがりの部分がわかったような気がしました。また、孫文との関係で言う、ごく初期に関係のいい時期がありましたが、それを無視すると、ずっと悪い。後に孫文が死んだ時に公然と批判したのは梁啓超ぐらいです。その批判は共産主義批判と同じレベルのことで、結局、個人の自由抑圧の問題です。その意味で言うと、孫文の国民党、民国の後半、さらには中華人民共和国を含めて射程に収めて批判するという視座を、彼は持っていた。そうであったが故に今度は逆に抹殺される、不当に無視されることになったわけで、二つのことがらは表裏の関係にあったと思います。

佐藤 たしかに康有為と孫文というのはある種、教祖型というのは共通していますね。梁啓超は違うタイプです。気質として、大將にはならない人なのでしょう。

狭間 そういつていい面があります。孫文、康有為二人と比べた場合には。

私など初めて耳にする人物の文章まで調査されていましたが、あれはどうやって調べたのですか？

狭間 それは人さまざまです。一番びつくりしたのは「羅蘭夫人伝」ですね。これは今まで、下敷きとして坪内逍遙のもの（春暹屋蔵訳「朗蘭夫人の伝」）を挙げるなど、いい加減なことが言われてきました。それを見ましたが、見たら違うという事がすぐにわかります。しかし、それ以上には進まなかった。ところが史伝を取り上げた松尾洋二君（梁啓超と史伝―東アジアにおける近代精神史の奔流）が見つけた。凝り性の松尾君のやり方は、国会図書館の目録、当時の雑誌等と定石どおりに進んだらしいのですが、『太陽』『日本人』『国民之友』『国民新聞』とシラミ潰しに繰って出てこない、これではダメだと方針を変え、量的に短いものの女性の合伝を探することに、十ばかりのところで見つけたそうです。見つけた時は跳び上がったのですが、苦勞が報われた時の喜びは本当によく分かります。効率よく調べるのは石川楨

浩君（梁啓超と文明の視座）です。彼の発見は大変なもので、調べるのもう名人です。お読みくだされば分かるように、それぞれに得手不得手がありますが、皆よく調べてくれました。

梁啓超の開国経験

佐藤 宮村さんの論文の話が出たので、今度は宮村さんに伺いたいと思います。宮村さんの論文も狭間さんの共同研究も、どちらも日本を媒介とした梁啓超の西洋思想受容を問題にしており、研究対象は共通しているわけですが、日本思想史研究者の宮村さんの場合、対象に対する関心の在り方も、対象への接近の仕方も、狭間さんとはおのずから違うものがあると思いますし、研究の結果得られた梁啓超像もまた、決して同じではないと思います。その辺りをお話し頂けませんか。

宮村 私の一〇年ほど前に書いた小さい論文がきっかけになったといわれて、私はとても光榮に思いますが、あの論文のきっかけは、いわば「瓢箪から駒」のようなも

佐藤 宮村さんの論文「梁啓超の西洋思想家論」が、共同研究の一つの大きな刺激になったということでしたが、実は私は宮村さんのあの論文の載った『中国―社会と文化』の編集をやっておりました。たまたま宮村さんが私のところに梁啓超の著作目録を借りに来られ、その時に話を伺って中国研究者の盲点を突かれた感じで衝撃を受けまして、これはなんとしても活字にして世に出さなくてはならないと、原稿料タダで強引に論文を書いてもらいました。雑誌が出た直後、狭間さんから宮村さんの論文を激賞するお手紙を頂戴した記憶があります。宮村さんは、梁啓超が西洋思想家を論じる際に中江兆民訳の『理学沿革史』を下敷きとして用いていることを明らかにし、『理学沿革史』およびその原著であるフイエの『哲学史』と梁啓超の文章の微妙なズレに注目して梁啓超の思想を分析したわけですが、今回の『梁啓超』では下敷きの調査が一段と精密になって、まるで絨毯爆撃のように綿密に行なわれているのに驚嘆しました。蘇峰や兆民あたりならともかく、

のであったわけです。私の関心というのは、兆民研究以来なのですけれども、近代日本における「開国経験」を考えるとということでした。「開国経験」はいろんな意味を持っていますが、その中の一つの大きな意味は文化接触の問題であって、私は当初は近代日本と西洋との間の文化接触の問題のなかで、兆民を中心にして問題を考えてきました。その兆民研究が機縁で、梁啓超の日本での明治思想との出会いという問題に気づき、いわば、日本における梁啓超の開国経験の問題に目を向けたわけです。その時の私の関心はどこまでも近代日本の問題であって、梁啓超にそれ以上立ち入って考えることはなかったのですが、今回、人文研究の共同研究で、梁啓超と日本思想との出会いというのが、私があの時予想していた以上の広がりや深さを持っていたことが、非常に精密に明らかにされた。これは何といっても共同研究の威力で、到底個人ではできないものだろうと思います。その他に物凄くいろんなことを教えられたわけですが、この研究を読みながら日本の開国経験と梁

啓超の開国経験とこの間の関連付けということについて改めて考えさせられました。また、私が非専門的な見地から、しかし比較的近いということで、近代の中国のこれまでの研究史について抱いてきたイメージが、この研究を通して新しい視点というか、問題というものがもう少し変わって見えるというか、そういうことを感じました。その両方が交わっていったところにあった一番印象的な論文は、狭間さんの論文（『新民説』略論）であつたので、そのことをきっかけに始めたいと思います。

狭間さんの論文の中で、「日本流に摂取された西洋近代文明のいわば（知層）としての蓄積」が、近代中国の文明化に果たした役割ということを言われて、そのもっとも象徴的な事例として、ブルンチュエリの問題を挙げておられます。これは私にとっても非常に面白い問題で、特に私が触発されたのは、ブルンチュエリを下敷きにするということで、狭間さんの言葉を使えば、「日本の官僚的国家建設の（体）となつたブルンチュエリの学説は、中国改造の（用）にふ

たたび動員され」ただ、と。同じものが日本の近代化で果たした役割と近代中国で果たした役割が異なつた形で現れてくると。このことは非常に重要な指摘でこの研究の持つ大きな意味と関わっているのですけれども、ここには先ほど言いましたように、単にその異なつた条件の中で同じ思想が異なつた機能を果たしたというに留まらない問題がある、つまりそこに梁啓超という人間が関わっているというふうに思うのです。

やはり梁啓超の固有の開国経験というのがそこに介在したからこそ、そういうことが可能になつたと思います。ブルンチュエリ論でしばしば取り上げられる「政治学大家伯倫知理之学説」（一九〇四年、これはいろんな意味で重要なもので、梁啓超自身の転換を象徴する論説であるという位置づけと、革命派と梁啓超の対立が非常に鮮明になつた論説であるという位置づけがなされてきて、従来の研究史上のいわば中核的意味を持つ論説です。私はこの論説についての読み方は狭間さんの論文が一つのきっかけとなつて非常に大きく変えられていく可能性

があるのではないかと感じました。

梁啓超にとつての開国経験に即して問題を見ていこうとした場合、こういうふうになると思うのです。つまり梁啓超がルソー的な共和制志向から保守化した。そしてそれと表裏して梁啓超と革命派との対立が鮮明になつた。確かにそういうふうにいわれてきたわけけれども、私はここは二重の意味で、梁啓超の開国経験、文化接触の問題を介在させてもう一回考え直す余地があるのじゃないか、と思うのです。梁啓超が日本に亡命した直後から、『清議報』にもブルンチュエリの翻訳が掲載されるし、彼の初期の論説にも非常にはつきりとしたその痕跡が見られるわけですけど、しかし本格的なブルンチュエリ論を書くのはアメリカから帰つてきたあとです。梁啓超の開国経験ということの中に日本経験とそれからアメリカ経験とこの二つの問題をここに介在させてみたらどうでしょうか。梁啓超における日本経験とアメリカ経験というのは非常に異なつた経験だと思ふのです。つまり、日本においては例の「和文漢読法」と筆談

という形で書物と知識人とを相手にしたコミュニケーションが成り立つ。しかし他面、日中両国政府の政治的な絡みがあつて行動が大きく制約される。それに対してアメリカに渡つたあとは、英語はだめだから見聞です。しかもそれは非常に自由な行動の中で見聞ができる。ですから日本とアメリカでは異なつた異文化経験というのを持つわけです。それが梁啓超のこれ以降の論説の中に深く投影しているのではないかと思うのです。

アメリカ経験について書いたのは『新大陸遊記節録』（一九〇四年）がありますね。

これは、日本でのブックシユな知識に比べて非常に対照的な経験の記録です。その中で非常に印象的なのは、日本で本で読んでいたこと、例えばルソーとかボルンハツクが言っていた「共和制あるいは民主制」というのは小規模国家でしか実現できないんだ」ということをアメリカで実際確信した、と言っている。これは、ある意味で奇異な事、アメリカが小規模国家だということは、そもそも奇異に聞こえるわけです。しかし、

梁啓超の『新大陸遊記節録』を見るとアメリカの共和制は連邦の次元で成立しているのではなく、州・ステーツ（state）において成立し、更に下の省や市において成立している、そのカウンティやタウンの次元での基本共和国があるからこそ、大規模国家でも共和制が可能になるのだ。これはトクヴィルなどに繋がる認識だと思います。

アメリカ論としてもこういう見聞を通してアメリカ共和制経験というのが前提にあるからこそ、『新大陸遊記節録』の序文で、

「顧みて我祖国を思うと我同胞は国において自治するあたわず、郷において、家において自治するあたわず」というような強烈な自己批判がでてくる。つまり、共和制というのをブックシユな知識でなくてアメリカという場において生活する中でリアルに見ればこそ、同じような大規模国家としての中国の現状での実現可能性に対して改めて疑問を抱いていく。アメリカから帰ってきた直後の梁啓超がブルンチュエリ論をもう一度本格的に書くのは、それなりの必然性があつた

わけで、アメリカのような基本的共和国の条件を持たない多民族大規模国家における国民国家形成の問題という形で、ブルンチュエリの国家理論はこれまで気づかなかつた問題を改めて梁啓超に提起したのだと思ふのです。

ブルンチュエリの国家論が国民国家論として非常に面白いのは、一九世紀後半の国民国家論というと、ジョン・ステュアート・ミルの『代議政体論』におけるナショナル・テイの議論であるとか、エルネスト・ルナン『国民とは何か』という議論がありますが、あれは、六〇年代、八〇年代の議論です。しかしブルンチュエリはそれより前に国民国家の理論と本格的に取り組んでいるなぞ、そういう議論がいち早くブルンチュエリの中で成立したかという点、ブルンチュエリに特有の事情があつたわけですね。つまり彼は「二つの祖国」を持っていた。一つはスイス、もう一つはドイツです。スイスをご承知のように多言語多民族国家で、ブルンチュエリの基本的な国民国家の第一のイメージはまずそこにある。したがって、言語

とか人種とか文化とか歴史とかといったものの同質性を前提とするのではなくて、国家たらんとする政治的意志の契機的重要性ということを言うのです。それに対してもう一つの祖国はドイツで、これはマイネツケのいうような文化国民だから政治的な統合はないけれど文化的な同質性がある。だからブルンチュリは政治的統合の契機と、文化的同質性の問題と、この両方を二つの祖国というところで葛藤しながら、しかし最後まで人種あるいは文化的同質性の問題に国民国家の条件を還元することに対しては一貫して反対している。むしろ民族や言語を超えたそういう政治的意志に国民国家の成立条件を求めようとした。梁啓超が「政治学大家、ブルンチュリ論（政治学大家伯倫知理之学説）」を書いたとき一番注目したのはこの面で、そういう政治的統合がルソー流の社会契約の論理ではなくて可能にする手だてを、ブルンチュリの国家有機体論の中に求めていく。だから、これは大規模な多民族国家における国民国家の形成という問題についての梁啓超の正面から

の応答の試みです。非常に面白いことには、ブルンチュリの国家論の中に含まれている国民国家の政治的契機と文化的契機の相克という問題は、日本における多くのブルンチュリ読者のなかでは、陸羯南を例外として、全く無視されていた。つまり日本では問題にされない、自覚されない問題に梁啓超は気づいている。と同時に、そのことが革命派に対する梁啓超の立脚点にもなってくる。つまり、革命派が「滅満興漢」といった時に、専制批判を満族の排除と結び付けてだけいるのだとすると、国民国家の問題を民族といういわば自然的条件に還元してしまうことになる。「国家」は「国民」の「活動的精神」、「固有の立国心」に支えられて始めて成立する。その意味で「国民」と「民族」は区別される。つまり革命派に対して梁啓超が強調したのは、こうした「国民国家」の論理であつたわけです。だから、革命派が「民族主義」の「民族意識」を「独一無二の法門」のように考えることにかんじて自分は反対だ。革命が異民族としての満族を排除することに支えられ

るんだつたら満族のもとで専制に甘んじた人民が果たして漢民族の専制を跳ね返せるのかとか、あるいは排除した漢民族に民族としての自立を認めるのか、ならば他の民族に対して同じく自立を認めるのかどうか。梁啓超があの時に革命派に突きつけた問題は、革命派によって乗り越えられたわけではなくて、問題として持続していく。いわばそういう問題との出会いとなつたのが、梁啓超の二重の意味での開国経験、そのなかで特にブルンチュリとの出会いであつて、私はそういう意味で文化接触というものを通して、梁啓超の独自の課題というものの再認識という問題にまで繋がっていくのではないか、ということを経間さんの論文を読みながら考えていた。そういう意味では触発的な論文ですね。

佐藤 いま宮村さんが梁啓超のアメリカ体験の意味を強調されましたが、梁啓超は一八九八年十月に日本に亡命し、それからほぼ四年たつた一九〇三年にアメリカ旅行をして、その記録を『新大陸遊記』としてまとめたわけですね（『新民叢報臨時増刊』）

として一九〇四年四月三日付けで刊行され、後に写真と付録を削った『節録』版を刊行。この時のアメリカ旅行は十ヶ月にも及ぶもので、華僑ネットワークを利用して、東海岸から西海岸までアメリカ全土をくまなく旅しています。『新大陸遊記』はアメリカの地名を漢字で表記しているのだから、分らない都市名がたくさん出てきますね。狭間 華僑のいるところを僻地まで尋ねたのですが、今、アメリカの研究者に聞いてもわからない地名がいくつもあります。佐藤 宮村さんがおっしゃったように、梁啓超にとってアメリカ旅行は大きな体験だったと思います。当時の中国では、アメリカの歴史や社会に関する情報は、日本やヨーロッパの情報と比べて少なかったように思われます。古くは宣教師の神治文（J. Bridgman）が編纂した『聯邦志略』がありますが（『美理哥合省国志略』として一八三八年にシンガポールで刊行。六二年に『聯邦志略』と改題し上海で刊行）、二〇世紀初頭の時点ですと、日本については例えば黄遵憲の『日本国志』があり、ヨーロ

ッパについてはティモシー・リチャードの訳した『泰西新史攬要』があるのと比べると、中国語で読めるアメリカ情報は乏しかった。たぶんこのことがむしろ幸いして、梁啓超は予備知識や先入観なしに、ともかく自分の目と頭脳でアメリカ社会の仕組みを考えようとしています。梁啓超にとって中国とは同じサイズで、しかし歴史が全く異なるアメリカがどうして国としてまとまっているのかという問題は、ひどく興味をひかれる問題だったはずですね。『新大陸遊記』を読んだのはだいぶ前のことですが、アメリカの自治の慣習と自由との関連を梁啓超が鋭く指摘していたのが印象に残っています。梁啓超は、アメリカは最も自由な国だが、その自由は独立革命を通して一挙に獲得したものではない、タウンミーティングのような植民地時代にさかのぼる自治の伝統があり、その基礎の上にはじめてアメリカの自由があると言っています。鋭い指摘ですね。裏返すと、自治や自由の伝統のないところで、革命によって一挙に自由を獲得しようとしても、結果として誕生

するのは混乱や独裁でしかないというわけで、フランス革命に対する批判、あるいはフランス革命を中国革命のモデルと考える人々に対する批判が生まれる。特に中国については、自治と結びついた自由の伝統はないかわりに、皇帝権力の網の目に引っ掛からない限り何をしてもよいという「野蛮自由」だけは豊富にあると梁啓超は考えていましたから、そうした環境では、革命は国民国家形成という課題に対する解答にはなり得ないという判断が生まれてくる。梁啓超の「転向」にとって、アメリカ旅行は大きな意味を持っていたと思います。

宮村 明治思想との関連から行くと少しずれるけれども、今言った梁啓超の思想形成の上で確かに明治思想は大きな役割を持ったけれども、それだけでなくやはりアメリカ経験というものも視野にいれると余計に明治思想の持つ意味が見えるのではないかと言うのが一つ、感じたところです。狭間 それは宮村さんのおっしゃる通りだと思います。アメリカ経験というものの、『新大陸遊記』のことはもちろん宮村さん

の言われた通りで、そういうことも含めてもつと梁啓超を考えなくてはと思います。もう一つ、今まであまりにも無視されてきたのはオーストラリア経験ですね。ただ今度の場合そこまで、はばを広げることはできなかつた。というのは、やはり日本のことをやるだけでも精一杯というところがあったわけですね。

佐藤 梁啓超のオーストラリア旅行は、一九〇〇年のハワイ旅行と一九〇三年のアメリカ旅行の中間だったと記憶しますが、何年のことでしたっけ？

狭間 一九〇〇年です。ハワイのほうは比較的な言言の言ですが。管見のかぎり、劉渭平先生の八九年の本『澳洲華僑史』星島出版社）くらいしか知りません。オーストラリア経験というものはいま言われた政治思想と違う意味において、彼の政治思想の立脚点、つまり中国の民度というものに対する理解という点で大事だったと思います。

また開国経験の問題は宮村さんの御専門ですが、確かに梁啓超の開国経験というべ

きものは日本が第一と言えらると思います。その場合、少し気になるというか教えてほしいのは、日本の開国経験が一応維新の前後だと仮定させていただきます。その後、維新の前後にできあがった国家というものがいかに具合の悪いものであると考えるか、あるいはこういう点について変えていくべしとの動きが日清戦争後、明治の三〇年前後からぐつと出てくる。その間ほぼ三〇年。

梁啓超が日本へ来たのは明治三〇年ですから、日本ではツーステップであったものが梁啓超ではワンステップになってしまおうという問題です。そうであるがゆえによけいに鏡として役に立つという面もあると思います。この違いの問題をブルンチュリで言うなら、革命への傾斜からの転向とか、あるいはルソーからの後退云々ということなら、個体発生が繰り返した系統発生、ということでは梁啓超の中にツーステップを指定できますが、よく見てみますと彼の場合そうではありません。そのことを最初に活字にされたのは山田央子さん（ブルンチュリと近代日本政治思想）『東京都立大学法学会雑誌』第三巻第一号）ではないかと思ひます。

宮村 ご指摘の通りです。

狭間 私はそう考えていましたから、日本史の方面の人が言っておられるのを見て感心しました。梁啓超の国家主義、国家観念はブルンチュリからしかない、と言っている。アメリカへ行つたあと、変わったのではない。問題は、訪米後にあのような形で吐露するというか、表白したというところに在るのです。それは内的に、やはり新しいアメリカとの文化接触が彼自身の思想の内質に影響を与えたからでしょう。

もう一つは外的な条件というか、政治的な状況としては、あの段階から梁啓超が清朝の立憲制採用の動きと密接に絡み始めるという問題が出てきます。それが表面では、中国の民度では自分たちの考えるような「新民」はつくれないから革命反対云々という文章となりますが、裏側では一番やりよい方法ということでは現体制にコンタクトする、その転換の一表示がブルンチュリの学説のあのような形で紹介の文章になる。あの文章まで、実は日本亡命からわずか五

年ほどです。しかも日本なら三〇余年の間、いろいろな言われるにしても皆みとめざるを得ない形で、維新の成果ができたが、中国ではそれが全然実効を現さないうちに辛亥革命になってしまひ、次の五年ないし一〇年の大問題がすぐかぶさってきますから、非常にわかりにくいのですが、しかし日本の達成というものを踏まえて、中国の改造をやるべきなんだと梁啓超らが考え、そのための相当の基盤を作り上げたことははっきり言えると思います。その場合にブルンチュリ云々ということと言いますと、一言しか書いていないのですが、善隣訳書館というものはもつと発掘せねばならないと思います。梁啓超のブルンチュリはすべて吾妻兵治の漢訳『国家学』に拠っているのですが、吾妻は、日本の経験は役に立つ、だからアジアの諸国に提供する、との姿勢で中国に関わっています。善隣訳書館や吾妻兵治のことは埋もれてしまいましたが、その後に分かったこともあり、昨秋の京都大学人文科学研究所七十年の国際シンポジウムで報告しました（論文集、近刊）。た

だ、善隣訳書館と梁啓超の関係は、単純ではなく、後には悪くなります。

アジア主義との問題

狭間 これはまた次の問題になりますけれど、日本のアジア主義団体として大きな役割を果たすことになる東亜同文会が一八九八年にできます。その時、吾妻兵治らのグループはそれに入っていない。その前に一緒にやっているのが、東亜同文会ができた段階では離れていくようにみえます。日本の文明的蓄積を訳書刊行の形で中国（アジア）に提供するとの意気込みで出発した善隣訳書館は本来まともな方向というか、基盤を築こうとしていた部分だと思ひます。ところがその後、日本のアジア主義の団体がかんたんに右の方向へと進む中で、埋没して我々の歴史的認識から消えてしまひます。そのこと自体、一つの検討課題です。それはともあれ、梁啓超の活動に打つつけの役回りを演じるはずの善隣訳書館との関係が悪くなったのは、版權問題が絡んでのことですが、善隣訳書館のこととはもつと

明らかにしたいものです。

佐藤 岡本監輔なんかですか。

狭間 そう、岡本監輔、吾妻兵治それから三島中洲、重野安繹ら、皆関係しています。今調べているのですが、岡本監輔の文庫、「岡本章庵文庫」は徳島県立図書館にある。その文書でかなり分かったのですが、と言つてもまだまだです。

佐藤 岡本監輔の本はずいぶん中国で刊行されています。王韜がかなり使っている。狭間 岡本監輔の『万国史記』は大変に流布し、海賊版が何十万部と出回ったそうです。人文研には日本の版はなく、村本文庫の海賊版しかありません。

宮村 今おっしゃったことは、とても大きな問題にも関わっているのだと思ひます。この本を読んでいて一つ連想したのは、北一輝のことです。北は、日本書の漢訳あるいは日本書そのものが、近代中国に対して非常に大きな影響力を持ったんじゃないかということについて最初に注目した論者です。『支那革命外史』の中で、北は「日本の政法文武凡ての思想の莫大なる漢訳は宛

として英国の翻訳がフランスを啓発せしと同様なりというべし」と言っていて、ちょうどフランス革命に対して、つまりその起源になった啓蒙思想家たちにイギリス思想が非常に大きな影響を与えたのと同じように、日本の思想作品が中国革命に対して非常に大きな影響を与えている、それはパレルと言ってもいいんだという。そこから先がまさに問題なんですが、北は、「日本は汝が与えたる思想に対して責任と榮譽を感ずべし」と言うわけなんです。

一方で北はその場合に、そういったことから直ちに日中の連合であるとか連繫であるとかといった事を引き出そうとする、いわゆるシナ通に対して批判的であって、影響を与えたといっても、例えば、日本で治安維持のために書かれた国家民族主義の道徳書が満人支配下の中国で革命派に別の意味で、「革命的に」読まれたに過ぎない、日本の側から意図して中国における変革なり革命なりとむすびつけようとして書いたものではないと指摘しています。逆にいえば、そういうズレみたいなものを自覚して

いないシナ通の問題性を、北は非常に鋭く批判しているのです。私はさすがだと思うのですが、しかし同時に北の中のこの問題に対する着目点、強調点というのが、結局のところ、「日本の興隆と思想とに抱かれて解化せるシナの国家的覚醒」という、ある種の優越意識に基づいていたことは否定できません。いいかえれば、「先進・後進」の図式の中で日本の思想が中国革命に対していわば指導的役割を果たしたという理解です。だから私は自分自身が「梁啓超の西洋思想家論」について書いたときも、この北のような視点に対してどう自分を区別するか、これはやはり文化の領域における帝国主義の問題と深く関わっている問題だと私は思うので、そういうものをどうやって、批判的に見直しながら、しかし、問題としての持続を考えるかということをおしやっていたいました。いまは、狭間さんがおっしゃった日本書の漢訳というのは日本人が進めて行こうとしたという、その初期の意図と善隣訳書館なんかと違った形でアジア主義者の側に微妙に取って代わられて

いくというのか、そのところの問題はこの本の中では直接はまだ出てきていないのですが、その問題を私は非常に、読んでいて気になったというか、知りたいと思った次第です。

狭間 実はこの本をつくって、その問題にようやく気がついたのです。大体、『国家学』の訳者吾妻兵治なんかは普通の字引や本なんかには出てこない。興亜会、亜細亞協会の資料集を出された研究者、九州の黒木彬文さんはいくらかご存知で、教えていただきました。梁啓超を位置づけるためには、日本のアジア主義そのものを少し見えておかなければいけないと思い、調べていくうちに幾らかのことが分かりました。この本とちよつとずれるんですが非常に大事なこととして、既に興亜会（二八八〇年創立）の段階で、ヨーロッパに共通言語があるようにアジアにも共通言語があるべきだということをも日本の側が言い出します。言出したのは広部精という中国語学者で、シナの「官話」を東アジアの共通言語にしようというのですが、そのような提言がなさ

れる背景には、真の交流と興亜のために音から学ぶ「正則」の方法で現代中国語を習得せよと、学界の重鎮、重野安繹が高唱するというようなことがありました。後の歴史から考えたら信じられないような話です。重野という人はたいへんに偉い人だと思いました。そして実際に広部が編集を担当して興亜会の機関誌は、一時、全部漢文にするのです。ところがやはり日本人には不便だということで、すぐに少し和文欄を復活します。亜細亞協会（二八八三年に興亜会を改組）の機関誌も漢文が基調です。明治の一〇年代に、「官話」を興亜のために共通言語にしよう日本人が本気で考えたことがあったのです。

それとの関連で言えば、中国のため、あるいは朝鮮などを含めてアジアの改造のために日本の経験役立てようという善隣訳書館のような団体が、その延長線上に出てきてもかまわないし、実は出てきた。発展しなかっただけです。さらに言えば、それに対応するような形で、梁啓超の『清議報』が日本文の広告を載せ始めます。これ

もすぐ止めますけれど、双方とも対等の連携を追求していたことはよく分かります。

戦後の側からしかものを見ていない我々は、戦争という大きなバリアの彼方はほとんど見えなくなっていたのですが、維新の後、ヨーロッパの先進性に驚愕したアジアの知識分子が、お互いに手を結び合ってそれに立ち向かうとし、そういうところに梁啓超も入ってきているわけです。

梁啓超が来日した時は二六歳です。いくら彼が頭が良くてもその若さで、しかもわずかの期間に、梁啓超は凝縮的に多くのことを経験しました。同時代の孫文とくらべても、その圧縮の度合いは際だっています。だからよけいに、梁啓超の明治日本における開国経験・文化接触の問題は、中国の側からだけでなく、日本の側からも併せて見ていかねばならないと考えて、この本を編集したわけです。

（以下次号）